

# 英雄譚に正当性を付与するための論理と情理

## ——ネット言論空間で展開された「狼牙山五壮士」名誉棄損問題の意味——

松 戸 庸 子

### 1. 序論

2016年8月15日、中国のリベラリズムがまた1つの敗北を喫した<sup>1)</sup>。というのは、抗日戦争中のエピソードを素材とする「狼牙山五壮士」英雄譚に対して、ジャーナリストの洪振快が2013年9月より提起していた疑義に関わって発生した4件の名誉棄損訴訟のうち、最終案件の第二審（中国では最終審）でも敗訴が確定したからである。

「狼牙山五壮士」英雄譚とは何か？一連の名誉棄損訴訟の論点は何で、どのような経緯をたどったのか？リベラリストの洪振快が関わることになった一連の名誉棄損訴訟の顛末から、いかなる意味を剔出できるのであろうか？これらが本論考のテーマである。

本稿の分析からわかるように、英雄譚の正当性を判じる司法の場で、抗日戦争に関わる“史実”の正当性・合法性根拠の説明には、共産党の指導、中華民族の英雄精神、民族感情、民族の記憶、社会的共有利益などの言説が使われて、この英雄譚の合法性が司法的にも認定されることになった。上記の言説を受容しないスタンスは「歴史虚無主義」と呼ばれ司法の場でも敗北した。

今日世界の至る所でポピュリズムの成長が認められるが、中国版ポピュリズムの生成や、政府から正当性を付与された世論の内容やその形成過程の特性が、「狼牙山五壮士」名誉棄損裁判をめぐるソーシャルメディア上での攻防からも垣間見えてくる。中国のリベラリズムが置かれた厳しい現状、直面する課題もここから見えて来るのである。

さらに、抗日戦争期に発生した事象を素材として鑄造されたこの英雄譚を詳しく分析する本稿の作業を通じて、平均的な中国人の対日感情の構成要素、論理やその構築過程の一端を知るという副次的な効用も得られる。

---

1) 習近平政権下の思想・言論統制の強化で検挙や拘留が相次いでいる。著名なケースだけでも、四川大地震による学校倒壊犠牲児童の名前を集めて公表した反体制芸術家である艾未未の拘留（習政権発足に先だつ2011年4月）、「第二次天安門事件」学習会の内容をソーシャルメディアに載せた浦志強弁護士の拘留（2014年6月）、人権派弁護士及び関係者233名の一斉検挙（2015年7月9日）などがある。リベラル派の境遇は年々厳しいものになっている。

## 2. テーマの解題—視点と方法

中国で人口に膾炙した軍人英雄譚の1つに「狼牙山五壮士」というエピソードがある。これは1941年の河北省保定市西方山間部での日本軍と共産党八路軍との戦闘の最中に狼牙山で発生したものである。狼牙山山頂付近における中国軍兵士の崖からの跳び降りをモチーフとしたもので、新中国の建国後には政府や共産党公認推奨の英雄譚となってきた。この逸話は1958年に映画化<sup>2)</sup>され全国の津々浦々で放映されてきたほか、長く小学5年生の国語の教科書にも掲載されてきた。

この「狼牙山五壮士」英雄譚が中国で流布してきた事実を一般の日本人は、朝日新聞が2014年5月30日から6月3日にかけて連載を組んだ「消される言葉—天安門事件から25年」という特集の中で知ることとなった。それは、広州市在住の張広紅（チャン・クワンホン）という名前の中年男性ブロガーがこの英雄譚に疑問を呈して投じた短いツイートが瞬く間に拡散され、そのせいで彼が7日間の行政拘留とノートパソコン没収という処罰を受けたという内容の報道であった[朝日新聞2014年5月30日]。

このツイート事件は尾を引いて、処罰を不服とした行政不服申し立て、行政訴訟（一審及び原告控訴）へと進んだ事実は上記の新聞報道では言及されていなかった。

さらに、この報道の2年後の2016年夏には、中国共産党幹部層の改革派の言論の拠点とされる雑誌社『炎黄春秋』の経営権の奪取と幹部の解任劇が発生したが、同雑誌がこの「狼牙山五壮士」英雄譚への質問状とも言える記事を上記ツイート事件の2ヶ月後に掲載したことも、この有名雑誌社解体劇の一因となった点は日本ではほとんど知られていない<sup>3)</sup>。

本稿は、『炎黄春秋』雑誌社解体の前半部分に当たる、ブロガーへの処罰及びこのブログへの言論上の支援をした『炎黄春秋』編集主幹の洪振快（ホン・チェンクワイ）の言論封殺事件の顛末を取り上げて、特に21世紀初頭の社会主義市場経済体制下の中国で“合法的な”言説が生成される過程や要因の分析を試みるものである。

洪振快の2度にわたる論文発表は中国言論界に大きな波紋を投げかけた。結果、4件の名誉棄損訴訟（洪振快がツイッター上で自身の名誉が棄損されたとして郭松民と梅新育2名のブロガーを告訴した事案2件と、狼牙山壮士のうち生き残った2人の兵士それぞれの息子たちから洪振快が告訴された事案2件の合計4件の訴訟がある）に発展した。洪振快は早い時期に『炎黄春秋』を辞職し、4件の訴訟—いずれも控訴—の最終審でも敗訴という形で司法的処理に終止符が打たれた。

この一連の訴訟の結果によって国と党が認定した「狼牙山五壮士」エピソードの正当性には一層の箔がつき、抗日戦争の歴史に鮮やかな花を添える一方で、勝訴で勢いに乗った左派や軍系統の言

2) 「反ファシスト戦争勝利70周年軍事パレード」が2015年9月3日に、戦後70年目にして単独行動として初めて抗日戦争勝利記念日であるこの日に実施されたが、真のターゲットは日本であり、ロシアと韓国の大統領や国連事務総長のほか、複数の途上国政府首脳が列席したことは記憶に新しい。この政治的な記念活動の最中に「狼牙山五壮士」映画のリメイク版を初版監督の娘秦燕氏を監督に据える撮影が決まったという[石言之2016]。

3) 1991年7月創刊のこの雑誌社は、中共の党内改革派の牙城とされ、胡耀邦や趙紫陽に関する記事も発表してきた。1989年の第二次天安門事件の再評価をすることが雑誌社の悲願でもある。民間人による出資と購読料のみで経営され、公的資金を全く受けてないにもかかわらず主管団体の変更を迫られ、2016年夏には当局から社長を含む幹部の交代を強要されて、経営権も当局に奪取されて母体は完全な骨抜き状態に陥った。8月号以降の雑誌を元の社員たちは“似非炎黄春秋”と呼び定期購読者も激減した。この雑誌社については及川論文（2015）が詳しい。

論人サイドからは、勝訴の根底にあったイデオロギーを強化する方向で「国家英烈名誉保護法」[趙小魯 2016：12-22]の制定を叫ぶ動きが出ている。

一連の論争や訴訟の過程で使われた言辞や論理から、歴史的事象に関する“正当な言説”の作られ方が垣間見えてくる。被告となった著名な言論人である洪振快やその弁護士が主張する憲法上の「言論の自由」は司法判断の中で一顧だにされず、“民族の歴史意識”“民族英雄”“民族の記憶”や“社会主義の核心的価値観”を内容とする“社会的公共利益”の言辞によってかき消されてしまった。たとえばリベラリストの1人で、北京大学で教鞭を執る憲法学者の張千帆は、法律と法治との同一視や、憲法と憲政との混同をも戒める中で、以下のように指摘する：

1982年憲法について言えば、理念と現実との間のギャップが殊更に大きい。なぜなら、民法、刑法ないし行政法は訴訟を通じてある程度の実効性を獲得できるが、「国の基本法」だけが、訴訟で上げられることがないために、司法レベルでの実施が未だに実現されていないからである。その結果、中国は長期的に「憲法はあれども、憲政はない」という状態に置かれている [張 2015：260]。

「狼牙山」に関する上記のツイート処罰事件や引き続き名誉棄損裁判に先立つこと8ヶ月前に当たる2013年の年明けには、「中国の夢 憲政の夢」という理想を年頭の特別社説として掲載した広州のリベラル紙『南方週末』事件が発生していた。事件と呼ばれる所以は、この記事は社会主義中国の思想・イデオロギーの“統括大本営”とも言える党中央宣伝部から記事の印刷直前に差し替えを命じられて、新聞社の上層部の一部が急遽原稿を書き換えて印刷・販売され、編集長の解任・交代となったからである。その過程では同新聞社の多くの記者が辞職をちらつかせて同社を取り巻いて集会を続け、全国のジャーナリスト・知識人・市民からの支援が集まり、海外でも大きく報道されたもので、一種の現代版“文字獄”であった。それは習近平の党総書記就任直後のことで、政権目標として「中国の夢」<sup>4)</sup>一偉大なる中華帝国の復活—を掲げた新任元首に対して、「『憲政』の実現こそが中国国民の夢である」とリベラル派が狼煙を上げたものの、発行直前に記事は封殺されてしまった。この「南方週末事件」の9ヶ月後に始まる「狼牙山五壮士」をめぐる訴訟の帰結は、徐々に旗幟鮮明となって来た習近平統治の本質を理解する貴重な材料となる。憲政を欠く体制の中で、“正当な史実”がいかに生成されていくのか、3年の月日を経て終止符が打たれたこの訴訟に関する一連の資料からその過程を再現し、英雄譚に正当性を付与したタームや論理を分析することが本稿の目的である。

この「狼牙山五壮士」問題に関する報道は我が国では少なく、イデオロギー上の配慮もあって中国での研究成果もまだほとんど無い。本論考は方法としては、こうした研究状況を勘案し、またこの訴訟問題の発端やその後の議論がソーシャルメディアの世界で行われた点を考慮して、中国のソーシャルメディア（各種ツイッター、各種ブログ、オンライン百科事典など）に掲載されたつぶやきや言論を資料として分析を行いたい。

4) 中共中央政策研究室主任の王滬寧が考案したもので、江澤民政権の「三つの代表」、胡錦濤政権の「和諧社会」に匹敵する習近平政権の国家課題が「中国の夢」である。しかしソフトな語感とは裏腹に、経済成長に牽引された海外拡張という強大な国家戦略のイデオロギーとなっている。シーレーンに位置する南沙諸島一帯での一方的な領海の主張や島嶼の軍事基地化、ユーラシア大陸を陸路と海路で東西に横断する「一带一路」政策による経済ブロック化など、「中国の夢」は当面のところ国家的な野望実現の推進力を存分に発揮している。

ポピュリズムが世界に蔓延し始めた今日、ソーシャルメディアは人々が感情を吐露する最も身近なツールとなっている。2016年11月のアメリカ大統領選挙では既存の世論調査の方法的な限界が明らかになると同時に、トランプの勝利を的中させた調査会社ブランズアイの調査方法に注目が集まった。この会社の成功のポイントは、その方法の特徴が従来型の電話調査ではなくソーシャルメディア上の市民感情の分析という点にあったのである。この会社のCEOであるクロッパーズは自社の予想的中が「ソーシャルメディアに映る人々の感情を正確に分析した」からだと言う。さらに彼は従来型の方法（つまり電話調査）を採る歴史ある世論調査機が、①人間の感情の強さを測れない、②質問に対する答えしかわからない、という二つの構造的な問題を抱えていると指摘している[クロッパーズ 2017: 38]。

中国において、インターネットによる言論空間の拡大は目覚ましい。伝統的メディアの官制報道機関は“党の代弁者（党的喉舌）”と民衆から揶揄され軽侮される。通信革命の中でインターネットが作りだした新しい通信環境の中で「BBS 論壇」と総称される「電子掲示板」「電子フォーラム」「チャットルーム」などが急速に成長して、官制報道が沈黙する国内外の重大事件に関する情報を掴んだり、ユーザー自らの主張や意見を自由に発表したりする言論空間が拡大している。「狼牙山五壮士」事件と訴訟の顛末もこうしたソーシャルメディアを通じて広まった。

本稿では、「網民」と呼ばれる中国のネチズンの取得情報や感情面を理解する上でも、そうしたネット空間に拡散された情報を史資料として分析の対象としたい。

### 3. 人口に膾炙した英雄譚と疑義の前史

まず始めに、「狼牙山五壮士」に対する中国の一般民衆の理解を確認しておく必要があるだろう。小学5年生用国語の教科書の記述がそのプロトタイプを提供してくれる。少し長くなるが、我々日本人にとっては隣国の人々の意識の中で抗日戦争がどのように記憶されているかの理解に資するという意味からも全文を訳出しておこう（作者は沈重：1915-1986 没）：

1941年、日本の侵略者は兵力を集結させてわが晋察冀（松戸注：現在の山西・内蒙古東部・河北）の根拠地へ大挙して進軍してきた。当時、第七連隊は狼牙山一帯でゲリラ戦を戦い抜く命令を出していた。1ヶ月余の勇猛果敢な戦闘を経て、第七連隊は龍王廟へ向かうことを決め、民衆保護と連隊移動の任務を第六班に下した。

敵兵を留め置くために、第七連隊第六班の5人の兵士は敵の追手に痛撃を加えながら、大人数の敵を狼牙山へと引き寄せる作戦に出た。彼らは峻嶒なる地形を利用して襲撃をしてくる敵を次々に倒していった。班長の馬宝玉は冷静に戦闘を指揮し、敵兵を引き寄せては手ひどく襲撃する命令を下した。副班長の葛振林が一発撃つや咆哮する様は、あたかも彼の満腔の怒りを小さな銃口でもってしては発散し終えないかのようにであった。戦士の宋学義が手榴弾を投げつける時は渾身の力を振り絞るようにいつも腕を大きく一回転させていた。胡徳林と胡福才の2人の年若い戦士は全神経を集中させて敵に向けて射撃していた。敵はついに一步も前進できなくなった。険しい山道にはあちこちに多くの敵兵の死骸が横たわっていた。

5人の戦士は勝利のうちに保護任務を全うし、自らも移動の態勢に入った。目の前には道が2本あった：1本は主力部隊が進んだ方向に向かうもので、この道を行けばすぐに連隊に追いつける、がしかし、敵兵はすぐ後を追って来る道でもある；もう1本は狼牙山の棋盤陀山頂へと通じる道で、この道は3面が



全て断崖絶壁となっている。どちらの道を行くのか？ 民衆と連隊の主力部隊を敵が見つけないように、班長の馬宝玉は鉄板を切り裂くように「進め」と一言発して棋盤陀山頂へと誘導した。戦士たちは血が沸き立つ思いで班長のすぐ後を追った。班長が退路の無い道へと敵を引き込もうとしていることを彼らは理解していた。

5人の壮士は山頂を目指して山を登りながら、大木や岩に身を隠して敵に銃弾を浴びせた。山道には敵の多くの死骸が残されていた。狼牙山の山頂に着くと5人の壮士は高みから下を見てすぐ後を追って来る敵への射撃を続けた。少なからぬ敵が山肌を滑落して体のあちこちが骨折していた。班長の馬宝玉も負傷し、弾丸も尽き、胡福才の手に手榴弾の最後の1つが残されていた。彼がその蓋を外そうとした正にその時、馬宝玉が無理矢理に前に出て手榴弾を奪い取って腰に挟み臼ほどもある大きな石を持ち上げて「同志よ、石を投げつけろ」と大声で叫んだ。たちまちのうちに、石は雹のごとく、5人の壮士の決心を載せ中国人民の仇怨を載せて、敵の頭へぶつかっていった。山肌には意味不明の叫び声が響き、敵は深い谷へと落ちていった。

さらに一群の敵が上ってきた。馬宝玉がサーッと手榴弾を取り出して蓋を開け、前肢に気力を込めて敵に投げつけた。けたたましい音が鳴り響き、手榴弾は敵の群れの中で花開いた。

5人の壮士は狼牙山山頂に屹立し、民衆と主力部隊が向かった遠くを眺めた。彼らは振り向いてさらに上って来る敵を眺めるや、勝利の喜悦がこぼれ出た。班長の馬宝玉は強く励ますように言った：「同志たちよ、我らの任務は勝利のうちに成し遂げられたぞ！」言い終えて敵から奪い取った銃を打ち砕くや、崖っぷちに行き、毎度の突撃と同様に、最初に深い谷へと身を投げた。戦士たちも胸を張って頭をあげ、次から次へと険しい崖から跳び降りた。狼牙山には彼らの壮烈な声が轟いた：“打倒日本帝国主義！” “中国共产党万岁！”

これ勇猛なる中国人民の堅強不屈の声！ 声は天地を驚かし、覇気盛んなること高山大河の如し！<sup>5)</sup>

この教材は小学5年生の国語の授業で使われているわけで、その意味の学習のほか、中国の学校教育では日本とは比べ物にならないほどに朗誦が重視されているために、朗誦を通じてこのストーリーが中国の小学生の精神の深い処で根づいてきたことが推測される。

実際のところ、この英雄譚はどれくらいの影響力があるのでしょうか？

以下で紹介するデータ（表-1）は正式なアンケートに基づくものではないものの、「狼牙山五壮士」のエピソードに対して、中国の今どきの大学院生レベルの人々がどのような意識を抱いているかに関するラフな素描を提供してくれる。これは社会学の教育を受けた中国大学院生が設問を作って、インターネットのラインを使って20歳台前半の若者から意見を聴取したものである。2016年10月中旬に実施され、男女62名から回答が得られた。設問は「狼牙山五壮士についてどう思うか？

7つの選択肢の中から自分の考えに近いものを選んでください」というもので、複数回答が許される意識調査であった。

（表-1）が示すように、現代の学歴の高い若者の3人に2人が“五壮士は立派で尊敬すべきもの”、半数強が“愛国心をそそられる”と認識していることがわかった。学校教育などを通じた“成果”

5) 出所は『中国語文朗誦網』〈<http://www.968816.com/Content/266/>〉(last accessed: 20/01/2017)。因みに延べアクセス数は2017年2月20日の時点で通算46,135,690回で、2016年7月10日からの220日間では1日平均のアクセス数は12,061回である。アクセス者は誰か？「狼牙山五壮士」の小学五年生の国語の教材版原文は中国の検索最大手「百度百科」をはじめ多くのサイトに掲載されている。本稿が使用したこの『中国語文朗誦網』サイトの特徴は、彭驚という男性の朗誦音声聞けるので、主な利用者は学習目的の小学生だろうと推測される。

(表-1) 「狼牙山五壮士」に対する中国の高学歴若者の意識 (複数回答可)

①「五壮士」はみんな偉くて、尊敬すべきだ	66%
②愛国教育でそのエピソードを思うたびに、心が愛国心に満たされる	56%
③屈辱的な歴史を銘記させる	33%
④日本人のことを嫌いになる	14%
⑤興味がない。特別な感想がない	9%
⑥このエピソードは架空なものに過ぎない、信じてはいけない	4%
⑦時遅れのもので、小学校のテキストに入れるべきではない	4%

(補記：自分の意見を積極的に述べる学生もいて、「大体はエピソードは事実である」、「愛国教育に賛成である」、「『五壮士』は我が国の誇りだ」などの自由回答があった)

なのか、懐疑的な者は4%しかいないことがわかるが、実はこの英雄譚に対しては、すでに1990年代中期に『長江日報』や『羊城日報』などの新聞で疑義が呈示されていた。左派系の言論人の石言之の記述からこれらの点を整理しておこう。

まず始めは1994年7月9日に『長江日報』で孟憲良 (モン・シェンリアン) は「五人重于泰山, 一人軽于鴻毛—当年狼牙山有六人 (5名は泰山より重く1人は鴻毛より軽い—当時狼牙山には6人居た)」という文章を発表し、以下のように述べた：

当時第六班には9名いて、数名が下痢で部隊から離れており、狼牙山上の作戦に参加したのは6名だった。商人出身の副班長の呉希順は敵を見るや投降しようと叫んだが、班長から却下されると1人山頂を離れて銃を高く上げて敵に投降したものの慌てふためく日本軍に銃剣で突き殺され、残りの5人は崖から跳び降りた。

(中略) 作者が自ら述べるところでは、かつては「晋察冀一分区戦線劇社」で働いており、劇社社長の胡旭が「紅一団」へ取材に行つて葛振林にインタビューをしたもので、帰ってから、この話しは劇社全員に紹介された。

(中略) この記事は一時大反響を呼び、多くの新聞や雑誌に転載されて、広範な読者の間に悪い影響を生み出した [石言之 2016a：一章 (1)]。

続いて、翌1995年8月11日には『羊城日報』の新しいコラム「鉄史鉤沈」で特約通信員の王豪強 (ワン・ハオチアン) が「壮歌重唱狼牙山」の中で以下のように述べた：

事績の詳細を知る人はすでに少なくなった。五壮士が崖から跳び降りたと言うのは“3人は跳び2人は滑り落ちた”ということである。馬宝玉などの3名は崖から跳んで犠牲となり、葛振林、宋学義は“崖の山肌を滑り落ち、そのために木に引っ掛かって生還できた”。

(中略) 作者が自ら語るには、この話は当時の「第一分区戦線劇社」指導員の陳遜から聞いたもので、彼女の夫は「第一分区第一団」政治委員の陳海涵であった [石言之 2016a：一章 (2)]。

1996年9月に狼牙山五壮士が所属した部隊の宣伝科の元科長である羅良偉 (ルオ・リアンウェイ) が、上記の『長江日報』の記事を葛振林に見せると「この記事は全くの無責任な出鱈目そのものだ」と激怒した、とされる [石言之 2016a：一章 (3)]。

(中略)羅良偉は歴史の真相に白黒つけるために慎重用意周到に準備をして声明文を書き、後の人々に明らかにするために「副班長の呉希順など言う人物はいなかった！第六班にいないのみか、第二小隊にもこんな名前の人間は存在しなかった」という声明を出した。

2005年3月21日に葛振林が88歳で亡くなると、3日後の24日には「人民教育出版社」国語の新版からこの「狼牙山五壮士」を削除することが報道され、翌25日には上海市が新版の小学校の国語の教科書から外すことが報道された。資料では葛振林が晩年を過ごした湖南省でも同様の削除が実施されたと言う〔石言之2016a：一章（4）〕。

このくだりの前には『狼牙山五壮士』名誉闘争記実の作者である石言之の解説があった：

2005年に葛振林が死去してからは関係部門が（価値観）多元化を理由として、「狼牙山五壮士」を教科書から削除すると、反共右派の漢奸勢力が迅速に反応を開始し、英雄を黒く塗りつぶす悪辣なデマを作り、邪教法輪功メディアがそこに付け込んで、大量のネット媒体、特にコメント型の電子掲示板はデマを分散させる悪辣な陣地となった〔石言之2016a：二章（前書き）〕。

この文章によって、筆者の石言之のみならず、それが深く関わる左派言論組織である「崑崙策研究院」―「狼牙山五壮士」に関する多くの言論をソーシャルメディアを駆使して流している―のイデオロギー上のスタンスが一目瞭然である。この研究院は洪振快が被告となった訴訟の原告側の代理人である弁護士の趙小魯や言論人の王立華、さらに洪振快が名誉棄損で提訴した裁判の被告である郭松民らの言論の牙城となっている。

いずれにしても英雄譚への疑念は90年代半ばから繰り返し出ていた点は注目に値する。

#### 4. 狼牙山をめぐるブロガー検挙と行政訴訟―言論攻防の始まり―

広州在住の中年ブロガーの張広紅によって「狼牙山五壮士」に関する短いツイートがなされたのは、習近平政権成立から9ヶ月が経ったばかりの時期であった。中国でもソーシャルメディアが一般民衆にとって発言のための恰好のツールとなった21世紀初頭の2013年夏に、張広紅がそれまで通りに気安く発したツイートには2時間で2500回の転送と300通のコメントがつき、彼が想像すらしなかった大事件に発展することになった。彼が軽い気持ちで2013年8月27日未明に発したツイートの中身は以下である：

袁騰飛先生が「狼牙山五壮士」の映画を制作する<sup>6)</sup>に当たり、シナリオライターの邢野が現地を訪ねて実情を調査した時、村民は以下のように言った：「この5名は臨時でゲリラ兵となった地元出身の八路兵で、村へ来てからは酒食をたかり、少しでも意に沿わないことがあれば村民を殴った。連中のうちの数人が銃を持っていたので村人たちはやつらの気に障るようなことはしなかった。そののち誰かが思

6) 「袁騰飛先生が『狼牙山五壮士』の映画を制作する」というくだりは不正確だろう。同映画の監督は史文煥である。袁騰飛というのは、高校の優良教諭で独自の視点から歴史を解説する人気有名人であるが、自由奔放な授業が災いして高校を辞職している。「袁騰飛先生が言うには、映画制作に当たり、邢野が……」くらいが妥当であろう。

について、連中の行状をこっそり日本人に伝えた。日本人は包圍殲滅のためにすぐにやって来た。村人はわざとこの5人を袋小路へと引き込んだのだ」[石言之 2016a：四章（19）]。

張広紅が居住する広州市公安局越秀区分局（公安とは日本の警察に相当）はこのツイートを問題視して8月29日の21時に張広紅を検挙し現場にあったノート型パソコン1台を押収した。翌30日に越秀区公安分局は「中華人民共和國治安管理処罰法」第25条第1項及び第11条第1款の規程に基づき7日間の拘留とノートパソコンの没収を決定した[石言之 2016a：四章（20）]。

興味深いのは、この検挙の翌日に、広州公安局の広報担当者が官制のネットアカウントを通してツイートを発し、張広紅を援護したことである。下記の広州公安局の新浪官方微博「@広州公安」は、ほどなく削除されたものの、2013年8月31日21時49分に発信されたツイートの中身が『ドイツの声（中文版）』で配信されている：

デマは叩きつぶす必要があり、この打撃は法に則って行い、拡散を断固防ぐ必要がある。拡散したデマが引き起こす客観的な悪影響は人々の恐慌を引き起こすことが十分にあり得る。国家機関及びその他の組織の正常な業務を攪乱し、社会秩序を攪乱してから初めて治安処罰法を適用することができる。しかるに歴史上の事実を歪曲したいくつかのデマは現実には公共秩序を攪乱してはいない。子産不毀郷校<sup>7)</sup>。デマの拡大を防ぐためにデマを叩くとしたら、民衆が口をつぐんで恨みを口にせず、通りが厳しい監視の目となれば、悪夢と化すのは明らかである[吳雨 2013/08/31]。

この公安局アカウントからの発信は15時間後の9月1日12時には削除されたものの、「子産不毀郷校」という2500年前の古典『左傳』の中の文言が耳新しいこともあって、ネチズンの間で注目を集めにわかにネット上の流行語になったという[吳雨 2013/08/31]。

張広紅の素朴なツイートに声援を送った公安の官制投稿を紹介した『ドイツの声（中文ネット）』によると、この公安サイトに投稿をしたのは広州市公安局広報処副処長の張勝春（チャン・ションチュン）は停職処分を受けて調査対象となり、このアカウントの管理人は別人と交代させられた。

前述のように、「狼牙山五壮士」英雄譚にはすでに90年代の中期には、その信憑性に対する疑念が投げられていた。しかも中国版ウィキペディア『維基百科』「狼牙山五壮士」(2017年2月11日)には、文革中、生存者2名の内の1兵卒であった宋学義がその神格化された英雄象を疑われて、批判闘争集会にまでかけられたという記述もある。かつては放任されていた同様の言論—しかも庶民が使うツイート—が、何故この時期、つまり習近平の統治下で行政処罰の対象になったのであろうか？ この点は習近平政権における思想統制や言論統制の強化という政治的環境上で大きな転換が起こりつつあったことを、この小さなツイート事件は物語っている。

実は張広紅によるツイート事件は氷山の一角で、この事件の背景には「ネット浄化」作戦（「浄网」行动）が政府によって進められていた点が看過されてならない。「狼牙山五壮士事案」はネット「浄化」作戦の中で恰好の処罰対象とみなされた。「ネット浄化作戦」そのものは2013年6月から強化が始まっていたとされる[朝日新聞 2014年5月30日]。

その後この行政処罰を不服とした張広紅は、まず広州公安局越秀分局に対して行政不服申立てを

7) 「子産不毀郷校」は『左傳・襄公三十一年』に記載がある。紀元前500年頃の皇帝舜王の言葉とされ、意味は「庶民が国政を語ることを禁止するものではない」という、支配者への戒めのお話である。



したものの、2013年10月30日に「公安分局の処罰決定は維持される」として却下された。それを受けて法廷闘争に持ち込んだが、一審の越秀裁判所では原告の敗訴となり、広州中級裁判所へ控訴し、2014年5月12日に二審の「法廷意見陳述」がなされたものの、判決は保留となっている。

張広紅の二審公判（2013年12月11日）での原告と被告それぞれの代理人の答弁や意見陳述のポイントを「南方都市報」が伝えている〔南方都市報2013年12月12日〕：

原告張広紅の弁護士による答弁のポイントは以下である：

- ①張のツイートは1958年に制作された映画「狼牙山五壮士」について語った歴史家袁騰飛のツイートを援用したもので、張本人の創作ではない。
- ②被告は、原告が発したツイート内容が①真実ではない、また②当該ツイートによる社会秩序の混乱を立証する証拠を呈示していない。公安は小学校の教科書に基づいて事実認定するのか？
- ③公安部が張広紅を拘留する際に、彼の家族に通知していないことは法律上の手続きに違反する。

被告サイドの反論は以下である：

対上記②：「狼牙山五壮士」という史実は深く人口に膾炙しており、民族精神のシンボルである。行政処罰の決定は明白で、法律は正しく適用され、証拠が十分なのは確実で、張広紅が本人の新浪微博や腾讯微博を利用して、「狼牙山五壮士」に関するデマのツイートを出し、周知の「狼牙山五壮士」事象の史実と一致しない革命先烈のイメージの歪曲はネット上で不良な影響を生み出した。

対上記③：拘留通知書は速達で通知済み、その受け付け証明をまだ法廷に提出していないだけである。

特に原告代理人からの質問②に対する被告側の答弁がトートロジーに終始し、「狼牙山五壮士」の英雄譚の内容自体の信憑性を検証することなく、社会的認知や革命英雄イメージを曲げた、という次元での政治的な答弁に終始している点が特記できる。

「狼牙山五壮士」英雄譚の真贋をめぐる行政訴訟の二審では両者が意見陳述をただけで判決は保留となった。しかしこの司法上の攻防は、著名な言論人である洪振快が関わった4件の名誉棄損訴訟に引き継がれ、当局（共産党、裁判所）や英雄譚の擁護者による十全の理論武装がなされて、英雄譚の正当性が司法によって確定されることになる。次章では、思想上の攻防の端緒となった広州のプロガーの訴訟と、洪振快が巻き込まれた4件の名誉棄損訴訟の見取り図を示しておきたい。

## 5. 「狼牙山五壮士」をめぐる訴訟の前史と経過

広州市一計画経済時代の中国では「資本主義の窓」と呼ばれた香港に近いこともあってリベラルな空気が強い都市である一のプロガーである張広紅の素朴なツイートには「治安管理处罰法」が適用され、一審では処罰が確定した（控訴審では判決保留）。その論拠やこの事案を徹底していたイデオロギー上の闘いは、まもなく改革派の総合誌『炎黄春秋』の執行編集長（当時）であった洪振快

(表-2) 「狼牙山五壮士」英雄譚に関わる訴訟：訴訟前史と各種訴訟の推移

時期	英雄譚への疑義と時代性	洪振快の言論活動と 5 件の名誉棄損裁判の推移
1941/ 9/25	狼牙山五壮士崖より転落	<p>洪, 『財經網』「小学課本“狼牙山五壮士” 有多不實」發表</p> <p>洪, 『炎黄春秋』に「“狼牙山五壮士” 的細節分歧」發表</p> <p>梅新育, 洪への批判をツイート (郭松民も追記・転送)</p> <p>洪・黄→豊台区人民裁判所へ梅新育を名誉棄損で提訴②</p> <p>洪・黄→海淀区人民裁判所へ郭松民を名誉棄損で提訴③</p> <p>編集長の洪振快と黄鐘:『炎黄春秋』雑誌社辞職の声明</p> <p>葛長生: 西城区人民裁判所へ洪振快を名誉棄損で提訴④</p> <p>宋福宝: 西城区人民裁判所へ洪振快を名誉棄損で提訴⑤</p> <p>葛・宋提訴: 開廷前会議 (意見陳述)</p> <p>洪・黄→梅新育 (被告) 名誉棄損訴訟②: 一審敗訴</p> <p>洪・黄→郭松民 (被告) 名誉棄損訴訟③: 一審敗訴</p> <p>洪・黄→郭松民 (被告) 名誉棄損訴訟③: 二審敗訴</p> <p>葛と宋→洪振快 (被告) 名誉棄損訴訟④⑤: 一審勝訴</p> <p>葛と宋→洪振快 (被告) 名誉棄損訴訟④⑤: 二審勝訴</p> <p>洪→解放軍報, 崑崙策網, 劉宏泉を名誉棄損で提訴⑥</p>
1958	映画「狼牙山五壮士」	
1994/ 7/ 9	『長江日報』に疑義	
1995/ 8/11	『羊城日報』に疑義	
1996	『長江日報』への反論	
2005/ 3/21	葛振林, 湖南にて死去	
3/24	教材から「五壮士」削除	
2011/12/14	『百度』に疑義スレッド	
2013/ 8/27	広州市, 張広紅ツイート	
8/30	張を検挙→行政拘留 7 日	
8/31	@広州公安が張を擁護	
9/ 9		
10/30	張, 不服申立て却下	
11 月号		
11/13	張, 公安を提訴①	
11/23		
2014/ 2/13	張, 一審敗訴①	
5/12	二審法廷意見陳述	
	しかし判決出ず①	
5/26		
5/28		
9/ 1	国務院, 狼牙山跳下り	
	場所を小蓮花峰と認定	
12/30		
2015/ 8/17		
9/ 3	抗日勝利 70 周年パレード	
11/30		
12/21		
12/22		
2016/ 2/29		
6/27		
8/15		
8/16		

に受け継がれていった。洪の発言でイデオロギー対立は活性化するが、その攻防のポイントは、洪の言論から派生した4件の「名誉棄損訴訟」—結果的には洪がすべて敗訴した—の中で明らかになる。或るブロガーの素朴なツイートが招いた“文字の獄”は、彼を援護した著名なジャーナリストである洪振快までもその攻防戦の渦中に巻き込んだ。(表-2)は本稿が分析の対象とした英雄譚に関わる6件(最終6件目の情報はネット上に無い)の訴訟の全体像をまとめたものである。

張広紅のツイートが招いた検挙騒動から10日後の2013年9月9日に、改革派雑誌社『炎黄春秋』の主筆・編集長の洪振快は、進歩派のサイトとされる『財經網』に「小学校教科書『狼牙山五壮士』には多く不実箇所がある」<sup>8)</sup>という論文を載せた。さらに彼は、(表-2)からもわかるように、ちょうど張広紅の行政不服申し立ての審査が進んでいる正にその時期に、別論文「『狼牙山五壮士』の細部の不一致」<sup>9)</sup>(以下では、短縮して「細部」と記述する)の執筆と『炎黄春秋』2013年11月号へ掲載するための作業を着々と進めていたのである。

特に後者の論文「細部」の中で着目した「狼牙山五壮士」英雄譚への疑義のポイントは4点にまとめられた。それらは①どこの崖から跳び降りたのか? ②崖を跳び降りたと言うがどんなふうに跳んだのか? ③敵と味方双方の戦闘による死傷者の規模はどれくらいか? ④“五壮士”は民衆が育てていた大根を引き抜いたのか? の4点に絞り、エピソードが発生した1941年から60年間の関連新聞記事(及び関係者の口述)、「日本の防衛庁の史資料」、雑誌や座談会での発言内容などの検証をして、通説への疑問を呈したのである。

この2本の論文は、習近平政権の第一期(2012年11月～2017年10月)の中国の言論界に象徴的な啓示となる風波を呼び起こした。ネットを中心とする言論空間で洪振快は反対派(軍部や左派系言論人)から袋叩きに遭ったのである。その結果、論文執筆者の洪振快と黄鍾(『炎黄春秋』の当該号の編集責任者)とが原告となった名誉棄損訴訟2件(〈洪振快—原告訴訟〉と以下で呼ぶ)と、洪振快が被告となった名誉棄損訴訟2件(〈洪振快—被告訴訟〉と以下で呼ぶ)が発生したのである。

〈洪振快—原告訴訟〉は厳密に言うと2件の訴訟から構成される。『財經網』と『炎黄春秋』に異なる2論文を発表した洪振快のことを、商業省の公務員である梅新育(メイ・シンユイ)がツイッターで「犬畜生の腹から生まれたヤツ(狗娘养的)」<sup>10)</sup>と罵倒したことへの名誉棄損に対する提訴が1件と、梅新育のこのツイートに「歴史虚無主義」というワードを追記し転送した左派系著述家の郭松民(クオ・ソンミン)を相手取った名誉棄損訴訟の2件であり、洪振快と黄鍾(『炎黄春秋』社の編集者)の連名での提訴となった。この2件は提訴から1年8ヶ月後までに二審(最終審)のいずれでも原告洪振快らの敗訴が確定している。この2件は(表-2)にあるように提訴、判決日時はほぼ同日で、さらに後述する「最高裁網」に掲載された記者会見(2016年10月19日)の主旨からもわかるように、判決文の論理もほぼ同じで一部は同一文章であるなどから、判決文の作成時の共同関係が類推される。

〈洪振快—被告訴訟〉他方で洪振快は2015年8月に、「狼牙山五壮士」の内の生き残り兵(葛振林

8) 洪振快2013「小学课本《狼牙山五壮士》有多处不实」,『財經網』,  
<http://www.caijing.com.cn/ajax/print.html> (last updated: 09/09/2013)。

9) 洪振快2013「“狼牙山五壮士”的细节分歧」『炎黄春秋』,2013年第11期,  
<http://www.yhcqw.com/html/qsp/2013/118/13118161626b7h749310h7f149gkb1k6hfj.html> ,  
 (last updated: 08/11/2013)。

10) 「犬畜生の腹から生まれたヤツ(狗娘养的)」というこの罵り言葉は日本語には対応する言葉が無く理解しにくい、ネイティブ中国人に聞くと相手を侮辱・罵倒する最高クラスのきつい罵言だそうである。

と宋学義)のそれぞれの息子(葛長生と宋福宝)から別個に名誉棄損で訴えられた。この訴訟でも2016年6月に一審敗訴、同年8月15日には控訴審(最終審)でも洪振快の敗訴が確定した。この二つの訴訟は、最高人民法院が1つの案件として処理しているので、本稿でもそれを踏襲する。

## 6. リベラル派言論人の名誉棄損訴訟における敗訴の論理と情理

「狼牙山五壮士」英雄譚に絡んで洪振快が巻き込まれた訴訟はいずれも名誉棄損訴訟であったが、前2件を〈原告訴訟〉、最後の1件を〈被告訴訟〉と分け、それぞれの争点や司法判断の理由を整理してみたい。資料としては「最高人民法院網」に掲載された「人民裁判所が“狼牙山五壮士”などの英雄人物の人格権益を保護する典型事案例」<sup>11)</sup>を使用する。この資料は、結審から2ヶ月後に中国の最高裁が開催した記者会見上で最高裁民事第一法廷裁判長の程新文(チョン・シンウエン)によって公表され、最高裁のホームページにも掲載されている。記者会見が実施されたのは一連の名誉棄損訴訟の最初の提訴から1年5ヶ月、最終裁判の結審から2ヶ月を経た時期で、司法当局が慎重かつ用意周到に準備を進め満を持して実施されたもので、いわば判例の解釈説明と党政府の意見発表の場でもあった。この資料には、司法当局ひいては中国共産党サイドが「狼牙山五壮士」を英雄視し正当化するための論理や深層の情動が凝縮されている<sup>12)</sup>。

### 6-1 〈洪振快—原告訴訟〉敗訴の理由

この〈洪振快原告・訴訟〉の原告は洪振快と黄鍾の2人である。洪振快と黄鍾から提訴された二名の被告である梅新育と郭松民のツイート内容をまず確認しておこう。

梅新育のツイート:『炎黄春秋』のこれらの編集者と執筆者は一体何を考えているんだ? 戦闘の最中には大根を抜いて食っちゃいけないのか? こんなことを言う著者や編集者は「犬畜生の腹から生まれたヤツ(狗娘养的)」の部類だと言っても遠慮しすぎなくらいだ」[最高人民法院2016]。

また、もう1件の訴訟で被告となった左派系言論人の郭松民の場合は、上記の梅新育のツイートを転送するとともに、「歴史虚無主義」という重要ワードを書き加えたのである:

郭松民のツイート:「歴史虚無主義に反対する。これらの“犬畜生の腹から生まれたヤツラ(狗娘养的)”を野放しにすると、笑止千万!」[最高人民法院2016]。

これらのツイートによって名誉を棄損され精神的苦痛を受けたとして、洪振快・黄鍾は連名で提訴したが、二審(最終審)でも敗訴した。この2件に共通する判決理由のポイントは以下である:

11) 原文は以下:最高人民法院2016「人民法院依法保护“狼牙山五壮士”等英雄人物人格权益典型案例」

12) このリストにはもう1件の民事訴訟の判決が載っていた。著名なブロガーの孫傑がツイートで戦時中に火だるまになった英雄の邱少雲を茶化したこと、及びそれを引用した清涼飲料水メーカー大手の加多宝公司による低俗な商業主義の宣伝活動が英雄の人格を侮辱し、社会公衆の民族感情や歴史感情を侵害したとして、被告が英雄の近親者に対して侵害を即刻中止して謝罪し、慰謝料1元の支払いを命じている[同上]。



- ①原告と被告双方の言論の背景、内容、必要限度を超えたか否か、因果関係とそれぞれの言論が産んだ悪影響を総合的に評価した。
- ②「狼牙山五壮士」の英雄譚は抗日戦争期に出てきたもので、中国共産党指導下の各民族人民が帝国主義統治を覆し、新民主主義革命の偉大な勝利を獲得したことの重要な構成要素で、共産党が抗日戦争中に精神支柱の作用を果たしたことはすでに全民族の共通認識となっている。
- ③狼牙山五壮士に代表される英雄や英雄譚は中華民族の敵を恐れず犠牲を恐れない精神の典型で、すでに中華民族精神世界と民族感情の重要な内容物となっている。これらに対する不当な評価や評論は社会公衆の民族感情を傷つけ、民衆の情緒的な批判を引き起こすであろう
- ④『炎黄春秋』に掲載された論文「細部」は形式上では細部を論じながらも全文の意図は「狼牙山五壮士」の英雄イメージへの疑義、甚だしくは根本からの改変を狙い、甚だしくは当該英雄譚に代表される中国共産党による抗日民族統一戦線の歴史的 position 付けや歴史的な作用への再評価を意図するものである。
- ⑤当該論文によって社会の激烈でマイナスの批評を浴びることは洪振快と黄鍾にとって予見可能であった。
- ⑥公衆による非難は洪振快と黄鍾の個人に向けられたものではなく、『炎黄春秋』誌に向けられたものであるから、原告の社会的評価を貶めたとは認定できない [最高人民法院 2016]。

被告の1人梅新育に対しては以下の判決理由が述べられた：

- ⑦梅新育のツイートは感情にかられた評価・評論である。使用された礼儀を欠く言辞は明らかに不当だが、社会公衆の普遍的な民族感情による直観から発された言葉で、「狼牙山五壮士」英雄のイメージの保護という意図から発されたもので、趣旨や主観的な動機は社会主義中核価値に符合しているから肯定できる [最高人民法院 2016]。

さらに「歴史虚無主義」という概念を提起した被告の郭松民に向けた判決文の中では、次の2点が付け加わった：

- ⑧郭松民のツイートは「細部」論文に代表される「歴史虚無主義」への批判を目的としたもので、「狼牙山五壮士」英雄イメージの擁護という目的意識に発すると共に、社会的共通認識、民族感情の表現でもあり我が国の主流の価値観に適合しており許容される限度を超えるものではない。
- ⑨転送されたツイートや追記した論評の内容の点では、広く読者一般考え方、ツイッターという社交のツールとネットメディアの技術特性やその習慣を考慮すると、被告のツイートは多数の一般ネチズンの認知・論評・価値判断そのものであり、被告ツイートが導き出したものではなく、被告のツイートが原告の社会的評価を貶めたものではない [最高人民法院 2016]。

以上が判決理由のポイントであり、さらに最高裁判所での記者会見の席上では、次のような「判決意義」が追加説明された：

〈梅新育被告訴訟の意義〉被告の言動にも不適切な部分はあったが、原告サイドにも自己の言論が他者からの非難を招来することの予見やマイナス評価への容認義務もある。裁判が依拠した

「権利侵害法」は行為者の行為自由と他者の合法的権益とのバランスを取るという原則を貫徹してきた。

〈郭松民被告訴訟の意義〉「狼牙山五壮士」英雄譚がすでに民族共同歴史記憶や中華民族の感情や精神世界の一部となっているため、原告の文章自体がこれらの社会共通認識や主流の価値観への疑問を呈することになり、論文がいかなる評価を呼び起こすかを予見し、同時に注意する義務があった。ソーシャルメディアやネット時代の社交媒体ツールが言論の容認度に対して新しい変化をもたらしたことで、被告の言論の主観面、因果関係や損害の悪影響などの要因を総合的に評価して判決を出した。この判決で、インターネット時代の「権利侵害法」が新たな発展を遂げた点を把握し、対立する言論間の相互関係を妥当に判定した〔最高人民裁判所 2016〕。

郭松民の言論で注目に値するのは「歴史虚無主義」というタームである。これは左派系の言論中で多用されるが、左派系弁護士の趙小魯は「英烈名誉保護法」制定の提言の中で定義する：

歴史研究や細部の考証を建前として、我々が革命英雄の顔に泥を塗って貶めるが、その根本的な目的は共産党、共和国人民軍と人民革命の歴史を否定することである。英雄のいない民族は希望を持たない民族である。革命英雄の名誉を守るとは、或る英雄個人の事情を守ることではなく、我々が民族の記憶、民族の歴史や民族の精神を守ることである。我々と歴史虚無主義との主要な闘いの領域は法律領域となっている〔趙小魯 2016〕。

抗日戦争からすでに 70 年、英雄は長年の間にすでに民衆の中で認知されたものであるから、英雄であるか否かの検証をしてはいけない。そうすることは共産党や共和国の軍隊や革命の歴史を否定することになるから。すなわち英雄譚も超経験的な存在で、党や政府が腐心して作りあげた英雄イメージに疑問を抱いてはいけないという論理の上に立っているのである。左派にとっては洪振快の言論内容は「歴史虚無主義」の典型であり、習近平政権下においては言論・思想上で許容されない思惟であることが明らかになった。

引き続き、洪振快が被告となった訴訟の判決のポイントを見ていこう。

## 6-2 〈洪振快—被告訴訟〉敗訴の理由

中国が改革開放路線へ転換して 30 余年、2010 年には GDP ベースで日本を追い抜いて世界第 2 位の経済大国に躍り出た。日中間のパワーバランスは逆転し、中国民衆はその経済的恩恵に浴するようになった<sup>13)</sup>。(表-2)にあるように、〈洪振快—被告訴訟〉では、抗日勝利 70 周年パレード直前にあたり国を挙げて戦勝ムードが煽り立てられていた 2015 年 8 月 17 日に提訴、訴状が受理され、翌 2016 年 6 月 27 日に一審で敗訴、提訴から 1 年後の 2016 年 8 月 15 日開廷の最終審（二審）で判決が下され、ここでも被告洪振快の敗訴という形で結審した。

提訴された西城区人民裁判所の判決に当たっては以下の 4 点がポイントとなった：

I：「中華人民共和国権利侵害責任法」第二条及び「最高人民裁判所民事上の権利侵害、精神的苦痛と賠償責任確定の若干の問題に関する解釈」の第三条の規程に基づき、生前の人格利益は

13) 中国の経済成長は目覚ましい。中国人観光客の急増や爆買い現象は庶民レベルの経済成長の指標である。

死後にも法律上の保護を受けられるから、原告の葛長生・宋福宝にはそれぞれの親である葛振林・宋学義の名誉や榮譽への侵害行為に対して提訴する権利がある。

Ⅱ：「狼牙山五壮士」という称号は、全軍、全国人民の間で普遍的に承認されている。

- ・特に中共八路軍が日本帝国主義に抵抗する偉大な闘争の中で生まれた英雄集団は中共が全国民を指導して最終勝利を勝ち取った重要事件を体現する。
- ・当該英雄の業績は、第一に広く宣伝され、抗日戦争の時期に無数の中国の子供たちを励まし侵略に抵抗させ、勇敢に敵と戦った精神的動機の一部であり、第二に人民軍が命をかけて国家利益を防衛し、国家安全を保障した全軍の魂の源の1つで、第三に平和な時代には「狼牙山五壮士」の精神は、我が国公衆が艱難辛苦を恐れず国民のため国のために終身奮闘する精神を作りあげるためのガイドとなる。
- ・これらの英雄やその精神はすでに全民族の広範な承認を獲得しており、中華民族共同記憶の一部であり、民族精神ないしは社会主義の核心的価値観の重要部分でもある。
- ・民族の共同記憶、民族精神ひいては社会主義の核心的価値観は我が国の歴史から見ても、現行法から見てもすでに社会公共利益の一部分になっている。
- ・よって、洪振快が書いた文章は葛振林・宋学義の個人的名誉を侵害したのみならず、社会公共利益を侵害したことにもなる。

Ⅲ：被告洪振快の文章は、「狼牙山五壮士」の戦闘中の英雄精神を全く評価していない。

- ・“崖のどこから跳び降りた？”などの些末な4点を主要な筋立てとし、いろんな時代の材料や当事者の複数時期の言論、甚だしくは文革期に紅衛兵が宋学義を迫害した時の言論などを主な証拠とするが、歴史的推移、それぞれの材料が作られた時代背景や材料の発言環境を全く考慮に入れていない。
- ・十分な証拠を欠く状況下では被告の論文は似非推論、似非質疑、似非論評であり、この論文に明らかな侮辱的言語が使用されていなくても基本事実と無関係ないしは関連が小さな細部を強調することで「狼牙山五壮士」の英雄精神に対して読者に疑問を抱かせ、基本事実の真実性を否定させ英雄のイメージと精神的価値を貶めた。被告の行為は他者の名誉権・榮譽権を侵害する特徴に合致する。
- ・被告の論文はインターネットを通じて全国規模で重大な影響を生み、故人となった英雄のみならず彼らの子供である原告の個人感情をも害し、さらに一定範囲で社会公衆の民族感情や歴史感情をも傷つけた。同時に「狼牙山五壮士」の精神価値がすでに内面化した民族精神・社会公共利益の一部分、したがって社会の公共利益までも傷つけてしまった。被告は一定程度の研究能力とインターネット使用の熟練能力を有する者としては上記のような悪影響の発生を認識しそれをコントロールする能力を持つべきだったが、告訴されたような文章を発表したのは被告側の明らかな過失である。

Ⅳ：被告は言論自由を持って抗弁するものの、学術・言論自由の前提は他者の合法的權益・社会公共利益や国家利益を侵害してはならないという点が確認された。これは我が国憲法が確立する自由に関する一般原則で言論自由と学術自由の許容範囲を示し、こうした許容範囲を超えてはならない法定義務がある。これは法治国家と法治社会が公民に対して求める基本的な要求で、全公民が負うべき社会的責任である。

- ・原告の父親の名誉・榮譽への侵害は中華民族の精神価値という社会公共利益の侵害でもあるから、洪振快の主張する言論自由は抗弁理由とはならない。

こうした論拠のもとで下された二審の北京第二中級裁判所で判決の判断ポイントは以下である：

「二審も「狼牙山五壮士」の敵との勇気ある戦闘とその意義の事実性を認定し、洪振快の「細部」研究が英雄イメージとその精神価値を貶めたこと点は確実であると判断する。洪振快の疑義には証拠が欠ける」。

そして洪振快・黄鍾が敗訴した先行裁判の判決でも述べられたような理由がトートロジーのごとく繰返された：

「英雄とその精神はすでに全民族から広範に承認され民族精神の重要な構成要素となり、社会公共利益の一部分であり、中国共产党は中国人民と中华民族の先鋒隊で全国人民の共同利益を代表し、国家から離脱しておらず民族利益以外の私利私欲は持っていない。中国共产党が発揚する「狼牙山五壮士」精神は壮士の子孫と関係する利益者の利益であるのみならず、共産党の利益でもある」。

洪振快は「狼牙山五壮士」名誉棄損訴訟の原告訴訟と被告訴訟の4件全ての最終審でも主張は退けられて、敗訴が確定した。別の角度から見れば、裁判過程を通じて五壮士の英雄行動そのものに対する検証と立証は無かったものの、英雄行為は思弁を超越した、直観によって認定されているもので、すでに国民や民族がそれを信じて社会主義的価値の一部となっているから、この英雄譚を擁護する行為は社会公共利益になっている。八路军英雄は抗日に勝利した共産党の構成員で、共産党は「狼牙山五壮士」精神を発揚するから、全国人民の利益を代表する共産党の発揚する精神は擁護されるべきだという、トートロジーが繰り返される。

判決文に散りばめられた正当性や合法性の根拠づけには「社会や民族の共同利益」「社会主義的核心新価値」「困難に打ち勝った英雄精神」「中华民族の共同記憶」「中华民族の利益を代表する共産党」等のタームが共用された。しかもこれらのタームから作られる命題は検証にさらされることを許容せず、反駁を許さない形而上学的な歴史観や世界観が生み出される。そしてそこから生まれる社会秩序は各種の処罰によって担保されるのである。そこにはP. バーガーが叙述する「聖なる天蓋」[バーガー 1979：3-42, 83]のごとき秩序世界が構築される。この世界秩序を構成するターム、命題や理論を作りあげるパワーの源泉は論理というよりむしろ先験主義、演繹主義を死守する情理・情動である。そしてこの情理・情動の中核にあるのが全国民の先鋒隊である共産党が作りあげた秩序の正当性である。この秩序は憲法の序言で国政は「共産党の指導の下」に行われるという宣言によって合法化されているのである。「狼牙山五壮士」英雄譚に関わる一連の訴訟は、中国という巨大世界の秩序を形成する論理と情理の存在に開眼させてくれたのである。

さらに、執政党である共産党と歴史的に一体化してきた中国人民解放軍を突き動かす独特の情動の存在を示唆する歴史学者もいる。河北省新河県一狼牙山の所在地に近い出身の2人の「革命烈士」に関係して、抗日戦争や国境内戦期の共産党のオルグや地下活動の検証作業から、共産党内には熾烈な路線対立や内訌があって、革命運動や粛清運動をめぐる党史の記述が政治問題化しやすい敏感な問題であるとともに、その過程で犠牲となった「烈士」の扱いは「中共という革命党の根源的心性に関わる問題である」という石川の指摘は重い[石川 2009：261-262]。抗日戦争や国共内戦を劣勢から勝ち抜いた紅軍・八路軍やその後裔である人民解放軍の将兵には、平和の時代を生きる常人の想像を超えた情念—ルサンチマン、勝利の愉悦や矜持—が存在する点も看過できない。「狼



「狼牙山五壮士」英雄譚の司法勝利の過程分析からは、時の経過につれて必然的に希薄化していく民衆の情念や情動に新たな息吹を吹き込まなければならない、という政権意図も見えてきた<sup>14)</sup>。

## 7. 結びにかえて一判決が示唆する政治体制の特性

「狼牙山五壮士」名誉棄損訴訟では左派・軍部派が勝利しリベラル派が4戦全敗となった。しかし、この勝利を支えた論理と情理は共産党が代表するとされる国民全般にはたして内面化されているか否かは実のところ未検証である。興味深いことに、中国語のオンライン百科全書『維基百科（ウィキペディア）』の「狼牙山五壮士」欄では、その「影響」という項目の中に以下のように3種のバージョンが掲載されている [「狼牙山五壮士」『維基百科』：2017年3月1日現在]：

**中国共産党版：**中華人民共和国成立後、棋盤陀の頂上には記念塔が建立され、元晋察冀軍区司令官の聶榮臻が「死を見て本懐に戻るがごときは革命軍人正に持つべき精神なり、死するとも屈せざることすなわち燕国の趙児女の榮譽ある伝統なり」という題辞<sup>15)</sup>を残している。しかも狼牙山五壮士の事跡は人民教育出版社から出版される小学校の国語の教科書にも編入されたこともある。

**学術版：**この事跡には特段の英雄行為は無いが、中共中央北方機関新聞の『晋察冀日報』が事件発生の40日後に「棋盤陀上五人の“神兵”」という報道をして崇高化、神格化をした。戦時中の誇大宣伝は理解できるが、時が経ち状況が変わったのだから歴史の真実に戻るべきだ。しかし1958年制作の映画『狼牙山五壮士』を経て小学校の国語の教科書にまで載せられ、中共の交戦の功績を表現する典型的な事例に作り祭り上げられてしまった。

**中国共産党文革版：**葛振林と宋学義が崖の跳び降りから幸運にも生還したことで宋学義は文革中に倍加された批判を受けた。宋学義は“ニセ英雄”“ニセ模範”と疑われて、批判闘争集会では吊し上げにあった：「崖から跳び降りたら死んじまう、お前はどのようにして生還できたんだ？ もう一度狼牙山へ行き跳び降りてみろ、死ななかったらお前を英雄と認めよう。家の屋根の上から跳び降りてもいい、狼牙山ほど高くはないが、死ななければ……」。

この『中文ウィキペディア』の分類が示唆するように、党・解放軍・政府（司法）が認定する正当な史観を受けつけないリベラル支持派がなおも存在することも事実である。しかし言論統制・思想統制を強める習近平政権では治安対策や言論統制を図る法律が相次いで制定されている<sup>16)</sup>：

2014年11月1日「反スパイ法」(中华人民共和国反间谍法)

2015年12月27日「反テロリズム法」(中华人民共和国反恐怖主义法)

2016年4月28日「海外NGO国内活動管理法」(中华人民共和国境外非政府组织境内活动管理法)

14) 特に若年層での“世俗化”進展を物語るエピソードがある。上海市で中高校の推奨ソング100選に台湾ポピュラーソングで周傑倫が歌う「かたつむり」が採用された。市の党委員会の科学教育部門責任者曰く「民族精神教育とは説教ではなく児童生徒の心身の成長の特性と吸収能力に適應する必要がある」([http://news.xinhuanet.com/edu/2005-03/15/content\\_2698036.html](http://news.xinhuanet.com/edu/2005-03/15/content_2698036.html))。興味深いのは上海市教育界が「狼牙山五壮士」譚の教科書からの削除を決定したのも2005年である。産業化の進展が招く世俗化への対応は中国でも重要政策課題の1つなのだ。

15) 元司令官の聶榮臻の題辞原文は以下：「视死如归本革命军人应有精神，宁死不屈乃燕赵儿女光荣传统」。

16) 国立国会図書館調査及び立法考査局の岡村は、この問題のエキスパートである [岡村 2016 など]。

2016年11月7日「サイバーセキュリティ法」(中华人民共和国网络安全法)

こうした法律が制定されたことで、かつては拘束や処罰の対象とならなかったケースも法律を適用されて有罪とされることが現実化してきた。現に「30年に亘り民間で日中間の友好活動を推進してきた『日中青年友好協会』の会長が、2016年夏の拘束から半年後にスパイ容疑で正式に逮捕された。起訴される可能性が高い」とのニュース[日本経済新聞 2017/2/25]は、日本のチャイナウォッチャーの間でも動揺を生んでいる。

「狼牙山五壮士」名誉棄損訴訟で洪振快の相手側（英雄支持派）代理人を務めた弁護士の趙小魯は、4件の訴訟全てで勝訴してまもなく「国家英烈名誉保護法」の制定を声高に唱道し始めている[趙小魯 2016]。この法律が制定されれば「判決は不公正で司法の独立を欠いた政治判決で憲法にも違反している」とネット上で発言を続ける洪振快も、もしもこの法律が施行されれば行政責任や刑事責任を問われる事態が発生することを意味する。

名誉棄損訴訟の判決文の中でも根拠として明言されたように、八路軍兵士の武勇譚・英雄譚の護持は、畢竟、共産党による権力篡奪・統治の正当性根拠を守ることであり、現政権及び解放軍にとって絶対に譲れない言論・思想上の攻防戦であった。洪振快は被告となった控訴審の意見陳述で「一審が認定した“公共利益”の内実は「狼牙山五壮士」の子孫と関係する既得権益者、すなわち中国共産党の利益であって、国家や民族は人民大衆の利益ではない」と抗弁したが、所詮は巨大な党組織—2016年末現在、党員数は8700万人—と政府へ振り上げた“螳螂の斧”でしかなかった。

「狼牙山五壮士」裁判は信訪[陳情と訳される：松戸 2012 及び松戸 2015]ではなく、司法のルートで片がつけられ、一見、法治が実現されたような印象を与える。しかし、最高人民裁判所長官の周強が「中国に司法の独立は無い」と年頭の会議で豪語した[周強 2017/01/14]ように、また「国家運営は共産党の指導下にある」と憲法の序言に明記してあるように、司法の最終判断も当然全て共産党の指導を受けたものであり、北京大学法学者の張千帆が憂慮するように、中国での憲政が実現する前には共産党が立ちはだかっているという現実<sup>17)</sup>は中国社会や政治理解の原点である。

日本人一般にとり、「狼牙山五壮士」訴訟は、隣国中国の正当な史観には政治が介入する余地が大きいことを改めて認識させてくれた。この隣国では、史実の評価に際しては、気が遠くなるような細かい検証や考証よりも党派的で・検証を拒絶する政治的な判断が優位性を持つというのが現実である。したがって、中国では「歴史」は可塑性が強く状況主義的に改変がなされる。日中関係が冷え込む中、屋上屋を架するがごとく、2017年1月3日には中国の教育部（日本の文科省に相当）から1本の通達が出された。現代史上の事績の発生から80年も経った今頃になって、「抗日戦争」の期間を8年から14年間に延長し、2017年の小学校から高校までの春季教材の中で「14年間の抗日戦争」概念を教え込むことを求めることが通達の趣旨である[新华网 2017/01/11]。隣国の史観の“柔軟さ”は学術上も外交上も限りなく我々の興味をそそる。

#### 参考文献一覧（五十音順）

石川禎浩 2009「新河県の中国共産党とその歴史—新川出身の二人の「革命烈士」を中心に」森時彦（編）『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所。

17) 中国近代思想史を専門とする緒方はラリー・ベイカーの研究を紹介して、憲法を超越する中国共産党の「主権性権力」の源泉が「実体憲法（中国共産党党章）」と「手続き憲法（中華人民共和國憲法）」との二元構造が中国政治の支配の正当性を保障する、これこそが党国システムの本質であると述べる[緒方 2015：28-35]。

石塚迅 2013「憲法に埋め込まれた個人抑圧の論理」『中央公論』2013年12月号。

及川淳子 2015「雑誌『炎黄春秋』に見る言論空間の政治力学」石井知章・緒形康（編）『中国のリベラリズム』勉誠出版。

緒方 康 2015「中国政治における支配の正当性をめぐって」石井知章・緒形康（編）『中国のリベラリズム』勉誠出版。

岡村志嘉子 2016「中国の反テロリズム法」『外国の立法』，国立国会図書館調査及び立法考査局。

クロッパーズ，ジャンビエール「SNSが映し出す世論の深層心理」『Newsweek ニュースウィーク日本版』，株式会社CCCメディアハウス，Vol. 32 No. 6（2017年2月14日号）

鈴木 賢 2010「現代中国における立憲主義—その現状と課題」高見澤 磨・鈴木 賢 2010『中国にとって法とは何か』（叢書★中国の問題群 3）岩波書店。

張千帆 2015「中国における憲政への経路とその限界」石井知章（編）・子安宣邦（跋）『現代中国のリベラリズム思潮』藤原書店。

バーガー，ピーター・L 1979『聖なる天蓋』（蘭田 稔訳）新曜社。

松戸庸子 2012「陳情制度のパラドクスと政治社会学的インプリケーション」毛里和子・松戸庸子（編著）『陳情—中国社会の底辺から』（初版第二刷），東方書店。

松戸庸子 2015「信訪制度に見る中国的“公民社会”の到達点」『日中社会学研究』第23号，日中社会学会。

吴雨 2013「广东警官质疑“净网”行动遭停职」『德国之声中文网』DW.COM[0209.2013，

〈<http://www.dw.com/zh/广东警官质疑净网行动遭停职/a-17060476>〉（last updated 02/09/2013）

洪振快 2013「小学课本《狼牙山五壮士》有多处不实」，『财经网』2013年9月9日，

〈<http://www.caijing.com.cn/ajax/print.html>〉。

洪振快「“狼牙山五壮士”的细节分歧」『炎黄春秋』2013年第11期。

最高人民法院 2016「人民法院依法保护“狼牙山五壮士”等英雄人物人格权益典型案例」

〈<http://www.court.gov.cn/zixun-xiangqing-28421.html>〉（last updated: 19/10/2016）。

石言之 2016a「一场共和国历史上罕见的斗争-捍卫“狼牙山五壮士”名誉斗争纪实」『察网』

〈[http://www.cwzg.cn/html/2016/chayanguanxing\\_0714/29440.html](http://www.cwzg.cn/html/2016/chayanguanxing_0714/29440.html)〉。

石言之 2016b「8月15日下午，人民法院终审宣判《炎黄春秋》前执行主编洪振快败诉」『昆仑策网』〈<http://www.kunlunce.com/ssjj/fl1/2016-08-15/107015.html>〉。

赵小鲁 2016「中华民族伟大复兴，呼唤尽快制定《国家英烈名誉保护法》」，『昆仑策网』

〈<http://www.kunlunce.com/gcjy/jjjs/2016-12-22/112222.html>〉。

白轅 2014「创建发展一套健全的中国宪政理论—强世功有关中国宪政形式主义与合法性问题的论述」『开放时代』2014年第2期（在线阅读）。

「男子称狼牙山五壮士欺压百姓被拘告警方败诉」腾讯网触屏版，

〈<http://xw.qq.com/news/20140214003169/NEW2014021400316900>〉。

付記：本稿は「2016年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」及び「2016年度科学研究費補助金（基盤研究 C）（課題 15K03890）」による研究成果の一部である。

# Logic and Sentiment to Justify the Tale of Five Heroes

## ——Implications of Defamation Issues Involving “Five Heroes of Mt. Langya” developed through the Internet——

松 戸 庸 子

### 要 旨

「狼牙山五壮士」とは、抗日戦争中の中国共産党機関紙の報道内容をもとに作られた英雄譚で、国語の教材として小学校教育の場で長く使用されたこともあり中国では誰もが知っている。この英雄譚への疑義は90年代から存在していたが、習近平政権が始まった2013年にインターネット言論空間で復活し、ブロガーの行政処罰とそれを支援したリベラル派言論人の司法上の敗北で片がついた。この裁判はリベラル派と現政権サイド（左派・軍部・党政府）との言論・思想上の闘いでもあった。判決文に散りばめられた英雄譚正当化のための論理の中核は「歴史虚無主義」の否定であるが、同時に論理上のトートロジー、史実検証の拒絶、中華民族の歴史的共同記憶、民族感情や精神の自明性などに訴えるという情理も垣間見えた。英雄譚をめぐる司法闘争の検証作業は、司法のトップが今年年頭の会議で司法の独立を改めて否定した中国の政治システムの特性研究にも通じる。